

## S01

### 小児期から青年期の顎関節症治療

○大野 陽子

(春日市おおの歯科医院)

#### 【目的】

近年顎関節症が一般に認識される様になり、若年者で顎関節症を主訴として来院する症例が増えた。従来より顎関節症の原因のほとんどが咬合由来のものである事が分かっている。当院に来院した顎関節症患者の一症例を通して、咬合の重要性と咬合平面と顎関節症の関連を考察したい。

#### 【対象と方法】

対象は17歳女子。治療方法としてスプリント療法を選択した。

#### 【治療方針】

- A) 中心位で咬合採得
- B) 咬合器付着。  
半調節咬合器 Denar MarkII を使用。
- C) 咬合診断
- D) 咬合干渉除去
- E) 咬合調整
- F) スプリント作製、装着後調整

#### 【結果】

スプリント装着1週間後に顎関節部疼痛及び click 音が消失した。咬合平面を正常化することにより咬合運動が円滑になった。

#### 【考察】

小児期から青年期にかけて顎関節症が発症する場合がある。原因は多々あるが顎と歯列弓の関係、上の下顎の垂直関係、咬合平面の異常が考えられる。本症例は、矯正治療を中断し顎関節症症状を主訴として来院した前歯部開咬の若年患者の治療法を報告したが、主訴が審美よりも機能に重点をおいていることを踏まえて咬合治療を行った。多くの開咬の場合、両側性咬頭対咬頭咬合である様に今回も同様の咬合を示していた。咬合治療を施した結果早期に顎関節症の症状が消失した。本症例では患者の主訴によるところもあるが、矯正治療を回避した場合咬合治療により機能回復の実現が示唆された。

#### 【文献】

- 1) Niles F.Guichet 「Guichetの咬合治療入門」  
1982
- 2) 田中良種、豊永美津糸 「咬合論の実践」 医歯薬出版株式会社、1984

## S02

### 上顎両側先天性側切歯に矯正後インプラントを用いて修復した1例

○許田 淵仁

もとだ歯科 小児歯科医院

#### 【目的】

小児歯科臨床において先天性欠損歯の症例に遭遇する機会は多い。常に保護者に正確な治療法と、その治療を行う適切な時期を説明しないとイケない。2011年日本小児歯科学会の調査発表により12都道府県での小児歯科外来患者の集計において10.9%の小児患者に1本以上の先天性欠損歯があり、また欠損の部位と欠損の数により治療法が様々で適切な時期に問題解決を行う必要があると報告されている。特に上顎両側側切歯欠損症例には厳しく審美的に要求されており、今回この様な症例を経験したので報告する。

#### 【症例】

患者：SM 男性17Y/O (H1年7月23日生)

初診：平成18年5月24日

主訴：12才から上顎の前歯部が歯間離開

家族歴：NP 既往歴：NP

現症：上顎両側側切歯の先天性欠損により、正中離開と犬歯離開により審美的損なわれ、患者はコンプレクスを感じている。

診療経過：H18.8~H19.3.multibracket 矯正治療法で上顎両側側切歯のspaceを得る。その後2本IPOI37-12-Mのインプラント体を埋入し、19年10月に歯肉のバイオタイプを改善、唇側軟組織の厚みの形態の改善のために結合組織移植を行なう。19年12月最終的に上部構造を装着する。4年のfollow upでインプラント体と歯肉の安定性が認める。

#### 【考察】

先天性欠損歯が発見した際には、早期的に矯正の手段を用いて十分な歯牙本来の空間を確保し、顎骨の発育が成熟するまでにspace retainerを使用しつつ必要があると思う。理想的なスペースがつかれなかった場合、隣接歯根近接になるとインプラント治療の難易度とリスクが高くなる。矯正で得たスペースでは歯槽骨の幅と高が屢々不十分であるため、長期の安定と審美的要求の為にridge augmentationと結合組織の移植を行なう必要がある。